

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	立体形状の選好と触る行為についての研究				
研究組織	代表者	所属・職名	短期大学部・准教授	氏名	藤田 雅也
	研究分担者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	短期大学部・准教授	氏名	藤田 雅也

講演題目	立体形状の選好と触る行為についての研究
------	---------------------

研究の目的、成果及び今後の展望

【研究の目的と概要】
 本研究の目的は、中学生が異なる形状の立体物を触る行為を調査し、触りたいと感じる形状や触り方について考察することである。調査結果を基に、選好する形状や触る行為に見られる傾向を分析することによって、美術科教育での題材設定における形との出会い方や環境構成などを具体的に検討し、表現活動や鑑賞活動の指導計画を構想する際の新たな視点を見出すことができると考えたからである。

調査では、6種類の立体形状に中学生が出会う場を設定し、活動の様子を動画記録した。動画記録から、触る行為を個別に抽出し、「触った人数」、「触った時間」、「最初に触った形状」、「触った回数」、「触った順番」、「行為の出現」などについて形状ごとに集計を行い、形状によって促される触る行為の傾向について分析した。

【成果及び今後の展望】
 調査結果の分析から、中学生は、どのような配置であったとしても、すべての学年において、「球」を選好して触る傾向が強く、最も触りたいと感じる形状も「球」であることが明らかとなった。また、形状によって誘発される行為が異なることや、「球」以外の形状は左端に置かれているものから触る傾向があることなども確認できた。触る行為や触り方を意識することによって、新しい価値を発見し、豊かな生活を築いていこうとすることは、中学校美術科における表現活動や鑑賞活動の授業づくりにおいても重要な視点であると考えた。

本研究によって浮かび上がってきた、今後の研究の課題は次の3点である。1点目は、「球」を選好して触る傾向が強いという中学生の実態に基づいた、具体的な授業カリキュラムについて検討することである。本研究の成果を基に、中学校の美術科教諭と共に、触覚を中心とした諸感覚の働きを考慮した、美術科の学習カリキュラムの検討を進めていきたい。2点目は、高校生を対象とした触る行為や選好する形状についての調査を計画し実施することである。COVID-19の感染拡大によって、当初予定をしていた高校生を対象とした調査を実施することができなかった。本研究の調査結果から、中学3年生になると、行為の出現についての割合が大幅に減少する傾向があることが明らかとなり、思春期から青年期にかけての触る行為の実態についてのさらなる検証が必要であると認識した。